

夜

わずかな雲間から望むことのできるひとつの星
滴る如き生体现象が浮いている
私が失ったものとは意思という外形でしかない

黒ではない色をした夜の雲
それを暖かく感じ、憧れに喘いでいるのは
枯渴した井戸から水をくみ上げることに似ている

すり鉢状の砂のくぼみにずり落ち
そこから見上げる星の瞬きは
死に対する恐怖をぼんやりと震ませてくれる

肩に載る猫が探しているものは何なのか
屈託のないその眼差しが追っているものとは
もしかして、私自身の意思そのものではないのか

絶対的孤独を手にすることができるのか
それとも嗚咽に咽びながら救済を求めるのか——
私は都合の良い回答を、実は既に用意している

昇りつつあると思われる月の白い光背に
神話の中に在ることを感じる——
混沌と再生が交互に訪れる神話の中に

かすかに感じられる地面の震えは
いつの間にか削ぎ取られていた畏怖を
戦きの中にじりじりと芽生えさせてゆく

あらゆる事象を統括する原理などありはしない、と

満足げな微笑を浮かべ

支配を欲する原理たちが次々と上陸を開始した

運動、陰陽、確率、美、生存、社会・・・

有機的かつ緩やかに手を取り合っていたそれらが

分離し、バラバラのままに押し寄せてくる

私は感じていた

再生の時間が近づいていることを

そのために滅びるものが必要であることを

(2011.5.15)